
幸せになってね.....。

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せになつてね……。

【Nコード】

N4890A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

心臓の病気で入院している僕には、もう時間がない。いつまで生きていられるのか分からないから……だから、彼女には幸せになつてほしい。こんな僕に残して上げられるものなんてないけど、それでは送るよ 幸せになつてね……その言葉と気持ちを。

世界はゆっくりと回っているのに、僕の周りはとても早く感じる。どうしてだろう。何もしないで一日過ごすのなら、僕は死にもの狂いで一日を過ごしたい。

それが楽しかったと思えるように。後悔しないように。

「空……どうしたの？」

「……ん？ どうもないよ」

脇にある椅子に座る彼女は、僕の顔を覗き込むように見ている。その顔がおかしくて、僕は笑う。

「あつ……失礼ね。なんで笑うのよ」

「ははっ ごめんね。つい、おかしくって」

「もうっ、空の馬鹿」

プイっと顔を逸らした彼女は、頬を膨らませてしまった。

「ごめんって……みゆき」

「ふんだ！ 許してあげないっ」

そっぽを向いたまま、小声で文句を言う彼女。可愛い僕の彼女みゆき。

付き合い始めてもうすぐ半年。短いような、でも僕にとっては長い半年。

「許してよお、みゆき」

「ん……。どうしよっかなあ」

僕が両手を合わせて謝ると、途端に悪戯っ子のような目を向けてくる。

綺麗な瞳を細めて、微笑む笑顔。

その瞳が、その笑顔が僕は好きだ。こうやって、僕はいつまで君を見ていられるのかな。

「じゃあ……キ」
みゆきの声を塞ぐように、僕は唇を重ねた。
それは キス。

喧嘩したら、キスして仲直り。

それが僕達のルール。
それが僕達の当たり前。楽しい事も悲しい事も、笑った事や泣いた事。

どんな時でも、何をしていても、僕達はキスをした。
だって、離れると息が出来ないんだ。寂しくて悲しくて、息が出来ないんだ。

だから、キスをしてお互いを感じている。「ここにいるよ」って、その存在を感じているんだ。

「もう……強引なんだから」

照れて真っ赤になった顔で、はにかむように僕を見るみゆき。その笑顔が、声が、何もかも愛しい。
後……どれくらい見れるのかな。

「それじゃ……私、帰るね」

「うん。気をつけてね」

綺麗な顔が少しだけ、悲しみに染まる。

僕は笑顔でさよならの挨拶をする。だけど、それはみゆきが一番嫌がる事。

「空……」 さよなら」だけは言わないで」
「ゴ、ゴメンね……。それじゃまた明日」
そう言って、みゆきを笑顔で見送る。

みゆきも同じように笑顔になり、部屋を出て行く間際に振り返っ

て手を振っていく。

静かになった部屋の中、残された僕はゆっくりと天井を見つめる。染み一つない天上は、真っ白。無機質な蛍光灯が呼吸をするように瞬く。それが、現実だと教えてくれる。

まだ、僕はここにいると言う事を。だけど、ここからは抜け出せない。この病院のベットが、この部屋が僕の住まい。もう随分と長い事、ここにいる。でも、もう時間がない。後、どれだけ一緒にいられるのか。ただ、それだけが頭を駆け巡る。

「みゆき……。ごめんね」

声が雫となり頬を濡らす。滲む世界は僕に何も語りかけてこない。

僕は死ぬ。

ただ、それだけは分かっている。

子供の頃から心臓が弱かった僕は入退院を繰り返していた。

辛い発作や身体が痛くなる薬。それらから逃げ出したかった僕は、一時期自ら命を絶つ事を考えた事もあった。

学校にも、ほとんど通えなくて友達も出来ない。そんな時に僕はみゆきに出会った。

僕と同じクラスの女の子、それがみゆきだった。とても元気な女の子。僕にはないものを全部、持っている女の子。一緒に過ごす内に僕は、みゆきの事が好きになっていった。でも、それは伝えてはいけない。僕はいなくなる人間。

でも、あの時のみゆきの笑顔は、今でも忘れられない。

『私は……空君の事、ずっと好きだったよ』

そう言ってくれたみゆきの声と表情。仕草は、今でも僕の心に刻まれている。僕に元気をくれたみゆき。

でも僕は何もお返しが出来ていない。だから、もう少し生きていたい。

お返しをするまでは。

「こんにちわ。空」

「うん。いらつしゃい。みゆき」

今日もみゆきが来てくれた。それだけなのに、僕にはとても嬉しい事。

加速していく僕の命は、いつまで持つんだろう。ろくそくが燃え尽きる前の、あの一瞬の煌き。

それが今の僕。もう時間がないんだ。

「今日は、何しよつか？」

「そうだね……」

それから暫く他愛もない話をしていた。

みゆきと話すのは楽しい。僕の知らない事をいっぱい教えてくれる。

僕は運動が出来ない。だから、体育をした事がない。スポーツというものを、僕は知らない。でも、それをみゆきは身振り手振りで教えてくれる。それだけで僕には、そのスポーツをした感覚が入ってくる。

とても楽しく充実した時間。僕からこの時間を奪わないで欲しい。お願いだから、奪わないで……。

「それじゃ……。私、帰るね」

「うん。あつ、そうだ」

僕の声聞いて、キョトンとした顔をするみゆき。首を傾げて、不思議そうに僕を見つめるみゆきの顔。

「もう直ぐ……誕生日だね」

そう言つと、みゆきは目を見開いて驚いていた。悲しそうで辛そうな表情を一瞬だけ見せて、すぐに笑顔で

「そつだよ。後……三日だよ」

「後……三日だね」

僕は声を重ねた。みゆきといるこの時間を大切にしたい。ただ、それだけの思いを胸にして。

「じゃ……気をつけてね」

「うん。じゃあ、また明日」

笑顔で手を振って出て行くみゆき。彼女が帰ると、この部屋はやかに静かになる。誰もいない感じがする。

全ての音が、僕の耳を通り抜けていく感覚がある。どこか遠くで聞こえているような感覚。そんなはずはない。

ゆっくりと胸に手をあてる。僕の心臓だって、まだしっかりと動いている。

「ちゃんと……うごい、っ!」

衝撃が身体中を駆け巡り、痺れさせていく。何故か怖い。この痛みは、僕に恐怖を与える。

僕は生きてるっ!

こうやって、ここにいるじゃないか。それ以外はないんだ。早く、明日になって欲しい。早く、みゆきに会いたい。

「みゆき。僕は……僕は、君を……」

誰もいない部屋。僕の声に、返事はない。誰からも声は返ってこないが、僕の中には響いてくる声がある。

『幸せだよ……空』

優しいみゆきの声。僕の心に刻まれたみゆきの声。幻でもなんでもいい。僕はそれだけで……。

「愛し　っ！」

身体に痛みが走る。痛みは、内側からどんどん広がっていく。病気の痛みとも、薬の痛みとも違う。

どうして、こんなに痛いのだろう。僕はもうダメなのか？　違う

……そうじゃない。

まだ、頑張らないといけない。もう少しだけ。

「まだ……生きてい、たい」

涙が自然と流れ落ちてくる。ゆっくりと時間をかけて、僕に染み込んでいく。

みゆきの誕生日まで後一日。

僕はみゆきへ送るプレゼントを考えていた。どんなものがいいか、一度みゆきに聞いた事がある。

でもみゆきは、ただ首を横に振って笑顔でこう答えていた。

『私は……何もいらないよ。空が……空だけがいれば』

それは一番嬉しい言葉。でも、一番辛い残酷な言葉。僕もみゆきのそばにいたい。

ずっと、みゆきの隣で歩いていた。

「でも……それも、叶わないみたい。時間が……ぐっ！」

身体がまた、痺れてきた。昨日から、身体が軽く感じる時がある。痛みも苦しみもない感覚。

とても楽な感じ。でも、ありえない事。もし、それを認めてしまふと僕は終わりだろう。だから今だけは、認めたくない。

せめて明日までは、ここに居させて欲しい。

「いらつしゃい……みゆき」

「うん。いらつしゃいましたあ」

入ってくるなり、おどけてみせるみゆき。やっぱり今日も笑顔だ。でも少しだけ、いつもと違う。

ゆっくりとベット脇の椅子に座るみゆきの表情は、なぜか暗い。

「どうしたの？」

「ん……別に」

「そんな事ないよ……変だよ？ みゆき」

僕の声に、黙って俯いてしまったみゆき。どうしたんだろう？ 学校に何かあったのだろうか。

こんな元氣のないみゆきを見るのは初めてだ。

「聞かせてほしいな……みゆき」

「そら……私……」

顔を覆ってしまったみゆきから、嗚咽が漏れ始める。突然の事に僕は声を掛ける事も出来なくて暫くそのまましていると、急に顔をあげたみゆきの瞳から大粒の涙が流れ落ちる。止まらない涙は、綺麗な色をして頬を伝う。

「み、ゆき……」

「ご、ごめんね」

涙を手の甲で拭いながら、笑顔を作ろうとしているみゆき。何があったのか分からないけど、そんな顔は似合わないよ。だから、笑って欲しい。

「そうだつ！ 今日はみゆきのたん」

「っ！ やめて！ 空」

僕の声を遮るようにして、みゆきが抱きついてきた。いきなりの事に驚いてしまったが、みゆきの身体も、腕も、震えていた。

泣いているから？ 何をそんなに震えているの？

「み、みゆき？ ……どうしたの？」

みゆきの身体がビクン、と跳ねるように動く。僕の首元にかかる吐息が乱れ、抱き締めている腕に更に力がこもる。

「もう……この、ままじゃ、いけな、いん……だよな」

「……え？」

「空……もう一年 経つん……っ……だよ」

耳元で聞こえるみゆきの声。だけど、その言葉の意味が分からなかった。

一年？ 何から一年経つのだろう。

「一年前の……わ、わたしの誕生日に……空は」

嗚咽交じりの声。途切れ途切れに聞こえる声が、その言葉が僕を包んでいった。

「……っ！」

「そ、そらっ！」

頭が痛い。激しい痛みに、身体が勝手に暴れ狂う。

僕の身体を必死に抱き締めてくれている温もりに、声に、次第に痛みが引いていった。だけど、やがて鮮明になってくる僕の記憶。それは、僕に起きたあの日の出来事。やっぱり、認めたくなかった。でも、それはできない。感じ始めていた身体の異変が、僕に教えてくれる。実感したくなかったが

「……そっか。僕……やっぱり、死んで、いるんだ」

みゆきが、息を飲む音だけが聞こえる。それが事実を告げている……そう思った。

「空……私は」

僕を見つめるみゆきの目は真っ赤で、頬は涙の跡でいっぱい。優しくみゆきの頭を撫でる。ゆっくりと、温もりを確かめるように。

「あ、あの日、私が望んだの……」

みゆきの声が僕を包んでいる。優しく撫でるような声は、僕の心に染み込んでいく。

「そ、そらに、そばに……いて欲しい、て……」

その言葉で、やっと理解した。僕がここにいる理由^{わけ}を。

僕はみゆきの願いを叶える為に、ここにいる。

それはみゆきの欲しがっていた、ただ一つのプレゼント。だから僕は、ここにいるんだ。

「みゆき……」

次第に掠れて、遠くで聞こえるみゆきの声。僕の身体が少し変だ。自由がきかなくなっている。

「やつ……嫌。空……いっちゃやだあ」

流れ落ちる雫が、僕の手をすり抜ける。いつの間にか、僕の身体は透け始めていた。

もう、ここには入れないんだ。

そう実感したが、なぜか怖いとは感じなかった。

「嫌……行かないでっ！ 私を一人にしないで、空っ！」

今まで感じていたはずのみゆきの温もりも、今は感じなくなってきた。

必死に僕を掴もうとするみゆきの手がするり、とすり抜けていき、呆然と自分の手を見つめているみゆきの瞳から、また大粒の涙が零れ落ちていく。

「また、お願いするから！ だから……」

もう駄目なんだよ。みゆき……僕はいつまでも、ここにいてはいけない存在なんだよ。

「駄目だよ……みゆき」

「そ、ら……」

ゆっくりとみゆきの唇に重なる。もう、温もりも感じる事はない。唇を重ねているのかも分からない。

それでも、僕は感じていたかった。最後までみゆきの温もりを、優しさを……この身体いっぱい。

「笑顔で見送って……」

「空……いやっ、いかないでっ」

「だめだよ……。もう、行かないと……」

僕を掴もうと必死に伸ばしては、宙を彷徨う手。出来る事なら、掴んであげたい。目の前に大好きな人が泣いているのに、何も出来ないなんてそんなの悲しすぎる。だけど、もう僕の手は何も掴めないんだ。

「そら……そ、ら、いや、いや……いやだあ」

「ほら　わら……って、よ」

僕の頬を、静かに流れ落ちる涙。

行きたくない。

でも、それは駄目なんだ。僕はもう、この世にはいない人間。ここにいたのは、きつと神様がくれた奇跡。

そして、僕への贈り物だったのかも知れない。楽しかったよ……この一年。どこにもいけない僕に、みゆきはずっと一緒にいてくれた。だから、これからはみゆきの幸せを願う事が僕の役目なんだ。その為に、僕は行くんだ。

「そ、ら……っ……そらあ」

「泣い……てちゃ、駄目、だ……よ」

「だって……。だって、だつてっ」

駄々をこねる子供のように、首を振るみゆき。本当に、こんな僕を愛してくれてありがとう。

言葉では感謝しきれないくらいの思いをありがとう。

「みゆき」

もう一度だけ、みゆきに触れたい。それが叶わなくても……。

「愛してる……。だから　」

そつと唇を重ねる。僕の思いをのせて、今までの愛をこめて。

「……ありがとう」

意識が遠のいていく感覚。体が軽く、浮き上がるようだ。どうやら、もう時間らしい。もつと一緒にいたかったよ。

みゆき、僕は幸せだったよ。君も幸せだったのかな？ 僕達の思いが同じなら嬉しいよ……」

「そら……そらぁ……。私……がんば、る……から」
流れ落ちる涙を拭い、僕を見るみゆき

「……愛してる。空……ありがとう」

最後に見たのは、僕の大好きなみゆきの笑顔だった……。

幸せになってね。みゆき……愛してるよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4890a/>

幸せになってね.....。

2010年10月8日15時30分発行